

# 津波碑前で行われる慰霊祭の実態調査とその効果に関する基礎研究

## Actual Condition and Effectiveness of Memorial Services Conducted in front of Tsunami Monuments

○平川 雄太<sup>1</sup>, 佐藤 翔輔<sup>2</sup>, 川島 秀一<sup>2</sup>, 今村 文彦<sup>2</sup>  
Yuta HIRAKAWA<sup>1</sup>, Shosuke SATO<sup>2</sup>, Shuichi KAWASHIMA<sup>2</sup>  
and Fumihiko IMAMURA<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 東北大学大学院 工学研究科

Graduate School of Engineering, Tohoku University

<sup>2</sup> 東北大学災害科学国際研究所

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

It is important for local residents to be continuously associated with tsunami monuments. In this paper, we investigated an effectiveness of the actual condition of memorial services which were conducted in front of tsunami monuments in Hirono town and Fudai village, by participant observation, document analysis, and interview survey. Consequently, it can be clarified that memorial services in both areas were not just perfunctory memorial ceremonies but substantial opportunities for memorial and tradition that local residents participate in independently. It is possible that consciousness for tsunami disasters of local residents were prevented by independent and continuous maintenance of tsunami monuments with specific intentions in both areas.

**Keywords :** tsunami monument, memorial service, participant observation, document analysis, interview survey

### 1. はじめに

これまで幾度となく大津波災害を経験している我が国には、大津波による犠牲者を供養するだけでなく、災害の記録を目に見える形で後世に残すことを目的に数多くの津波碑が建立されてきた。しかし、大津波災害の再現期間は人間のライフタイムサイクルを上回っており、大津波を経験していない世代が、過去の津波災害の石碑から今次津波の危険性を認識するまでに至るのは難しい。寺田<sup>1)</sup>は、津波碑を立てて永久的警告を残そうとしても、道路改修や市区改正等により移動されることも少なくなく、人々の目に止まらなくなり認識されなくなった頃に、再び津波が襲ってくると問題点を指摘している。津波碑を建立する動きは盛んであるが、多くの津波碑は建立後の活用・維持管理が十分に行われていない。

定池<sup>2)</sup>は、1771 年明和大津波で甚大な被害を受けた沖縄県石垣島において、追悼の場が必要であるとの考えから「明和大津波遭難者慰霊之塔」が建立され、明和大津波発生日の 4 月 24 日に毎年追悼式が行われていることを調査した。一方、大津波の常襲地域である東北地方においては、岩手県洋野町および普代村で、東日本大震災以前から津波碑前で慰霊祭を行うことにより、津波碑との関わりが継続されてきた<sup>3)</sup>。津波碑に関する前述の問題がある中で、両地域で行われている慰霊祭からは、今後大津波に襲われるリスクのある地域の防災に生かせる知見を得られる可能性がある。しかし、これらの活動は各地域で独自に行われていること、また過去の慰霊祭に関する詳細な資料が残されていない等の理由から、両地域の慰霊祭がどのように行われているのかは不明である。

以上を鑑み、本稿では、慰霊祭への参与観察、資料分析、地域住民へのインタビュー調査から、洋野町および普代村で行われている慰霊祭の実態を整理し、その効果

について基礎的な考察を行うことを目的とする。

### 2. 対象事例および研究手法

#### (1) 対象事例

本研究では、岩手県洋野町八木地区で行われている昭和三陸大津波慰霊祭および岩手県普代村太田名部地区で行われている三陸津波記念日慰霊祭を対象とする。1933 年昭和三陸地震津波では、八木地区で 79 名<sup>4)</sup>、太田名部地区で 100 名<sup>5)</sup>の死者を出すなど甚大な被害を受けたが、2011 年東日本大震災では両地区とも死者数はゼロであった<sup>6)</sup>。これは慰霊祭等を継続して行うことで地域住民の津波災害への危機意識が繋ぎ止められてきた故の結果であると推察された。

#### (2) 研究手法

本研究は、慰霊祭への参与観察、資料分析、住民へのインタビュー調査から構成される。筆者らは、2016 年 3 月 3 日（木）に普代村太田名部地区で行われた慰霊祭および 2016 年 3 月 6 日（日）に洋野町八木地区で行われた慰霊祭へ参加し、両地区でどのように慰霊祭が行われているのかを調査した。資料分析では、オンラインで公開されている過去約 10 年分の両地区の広報誌（「広報ひろの」、「広報ふだい」）および岩手日報を対象に、両地区の慰霊祭の変遷等について考察した。さらに地域住民を対象としたインタビュー調査では、東日本大震災当時広報担当であった洋野町役場および普代村役場の職員にインフォーマントとしてご協力頂き、慰霊祭への参加動機、慰霊祭の変遷、慰霊祭に対する考え等を抽出した。

### 3. 研究結果

#### (1) 慰霊祭の内容

表 1 に、両地区の慰霊祭の流れを示す。また図 1 には、

表 1 両地区の慰霊祭の流れ

| 普代村太田名部地区の慰霊祭（2016年3月3日） |                       | 洋野町八木地区の慰霊祭（2016年3月6日） |                      |
|--------------------------|-----------------------|------------------------|----------------------|
| 時刻                       | 事項                    | 時刻                     | 事項                   |
| 7:58                     | 主催者代表挨拶（普代村役場総務課）     | 8:58                   | 慰霊祭開式 参列者全員による1分間の黙祷 |
| 8:00                     | 防災行政無線によるアナウンス（慰霊祭開式） | 9:00                   | 洋野町町長による焼香・挨拶        |
| 8:01                     | 参列者全員による1分間の黙祷（サイレン）  | 9:03                   | 洋野町消防団長による焼香・挨拶      |
| 8:04                     | 普代村村長による挨拶            | 9:06                   | 洋野町副町長（2名）による焼香      |
| 8:07                     | 村関係者、消防団、住民の順に献花      | 9:07                   | 町関係者、消防団、住民の順に焼香     |
| 8:14                     | 慰霊祭閉式                 | 9:14                   | 主催者代表挨拶（洋野町消防団第二分団長） |
|                          |                       | 9:18                   | 慰霊祭閉式                |



図 1 太田名部地区および八木地区の慰霊祭の様子

両地区の慰霊祭の様子を示す。両地区の慰霊祭とも約 20 分程の内容であり、似たような次第で行われた。しかし、両地区の慰霊祭の間にはいくつかの相違点がある。まず、普代村太田名部地区では普代村役場総務課主催であるのに対し、洋野町八木地区では地元消防団主催である点が挙げられる。すなわち太田名部地区では「行政主催型」の慰霊祭、八木地区では「住民主催型」の慰霊祭となっている。しかし、太田名部地区の住民の中では、毎年 3 月 3 日に津波碑に集まって供養を行ったり、あるいは自宅で供養を行ったりと、行政主催の慰霊祭だけでなく自主的に供養を行う生活文化が根付いていることがインタビュー調査から確認された。この点について詳細は後述する。また、慰霊祭で行われる供養の形式が、太田名部地区では「献花」であるのに対し、八木地区では「焼香」である。岩手日報 2007 年 3 月 4 日号に、太田名部地区の慰霊祭では「参加者が記念塔に献花した」、八木地区の慰霊祭では「出席らが慰霊碑に焼香した」と記述されていることから、供養の形式に関しては十数年間変化していないことが考察される。さらに、太田名部地区では昭和三陸地震津波が発生した 3 月 3 日に合わせて慰霊祭が行われているのに対し、八木地区では毎年 3 月の第一日曜日に行われていることも重要な違いである。この点に関する議論は後述する。

図 2 に、両地区の慰霊祭の参列者の構成を示す。図より、八木地区では消防団と一般住民の割合が大きいのに対し、太田名部地区では一般住民の参加率は 2 割に満たない。これは太田名部地区では八木地区に比べて高齢化

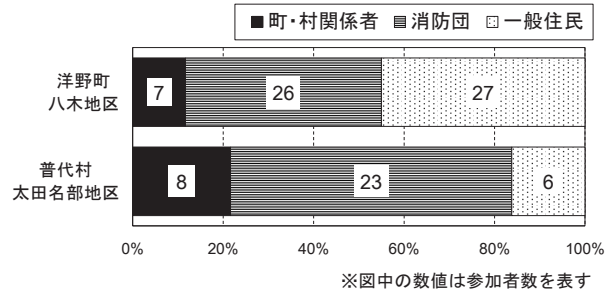


図 2 両地区の慰霊祭参加者の構成（2016 年）

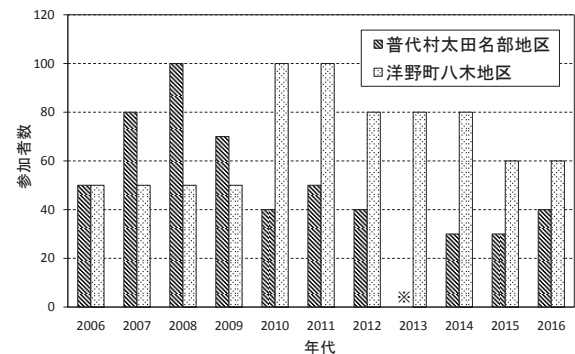


図 3 両地区の慰霊祭の参加者数の推移

が進行していること、平日休日関係なく毎年 3 月 3 日に行われるため、就業時間と重なって参加できない住民が多いこと等が原因と考えられる。

## (2) 慰霊祭の変遷

過去 10 年分の両地区の広報誌および岩手日報には、おおよその参加者数に関する記述がある。図 3 には、2006 年から 2016 年までの両地区の慰霊祭への参加者数を示している。図より、太田名部地区では 2008 年以降参加者数が減少傾向にあるが、八木地区では参加者数の大きな減少は見られないことがわかる。2010 年に八木地区で参加者数が倍増したのは、2010 年 2 月 27 日に南米チリで発生した Mw8.8 の地震に伴い、岩手県で初めて大津波警報が発令されたことで人々の津波災害に対する関心が高まったことに起因すると考えられる。

岩手日報 2008 年 3 月 3 日号に、「例年は三日に慰霊祭を開いていたが、今年初めて日曜日に実施した。」という記述があり、以降八木地区では毎年 3 月の第一日曜日に慰霊祭が行われている。このことから、2007 年以前は八木地区においても、昭和三陸地震津波が発生した 3 月 3 日に合わせて慰霊祭が行われていたことがわかる。八木地区の慰霊祭は地元消防団主催であり、多くの消防団員、地域住民が参加できることを優先して日曜日に変更されたのではないかと考えられる。

表 2 には、住民へのインタビュー調査から抽出できた、慰霊祭の変遷に関する証言をまとめている。今年の八木



表 2 慰霊祭の変遷に関する住民の証言（抜粋）

| インタビューイ | 地域     | 調査日        | 慰霊祭の変遷に関する証言（抜粋）  |
|---------|--------|------------|---|
| 70代男性   | 八木地区   | 2016年9月24日 | 小学生の頃から慰霊祭に参加しているが、 <u>子どもの頃は3月3日が楽しみだった</u> 。地元の菓子屋がドーナツを無料でくれたから。このドーナツは地元消防団が <u>地区の経費で買ったもの</u> 。この取り組みが、当時小学生も慰霊祭へ参加するきっかけとなった。ドーナツ配布は私が30代の頃まで続いていたと思う。 |
| 70代男性   | 太田名部地区 | 2016年9月25日 | 昔は3月3日に村で避難訓練を行っていたが、 <u>3月3日に避難訓練をやらなくなってから、行政が慰霊祭をやるようになった</u> 。  |
| 80代男性   | 太田名部地区 | 2016年9月25日 | 小さい頃から参加しているが、昔はお花やお供え物を持っていった。慰霊祭が終わるとその場で皆でお菓子を食べたこともある。今では村の慰霊祭には参加していないが、 <u>3月3日には集落の仲間内（20名ほど）で拝みに行っている</u> 。   |
| 70代女性   | 太田名部地区 | 2016年9月25日 | 昔は毎年3月3日の7：00頃から村の避難訓練があったが、 <u>訓練が始まる前に消防団や住民が花を持って石碑に拝みに行っていた</u> 。   |

表 3 慰霊祭に参加した（参加しなかった）理由に関する住民の証言（抜粋）

| インタビューイ | 地域     | 調査日        | 慰霊祭に参加した（参加しなかった）理由（抜粋）  |
|---------|--------|------------|--|
| 50代女性   | 八木地区   | 2016年9月24日 | 回覧板で慰霊祭をやっていることは知っているが、お店（釣り餌）を出さなければいけないため、参加したことはない。   |
| 40代女性   | 八木地区   | 2016年9月24日 | 20年位前に八木へ嫁いできたが、当時から回覧板で慰霊祭の存在を知り、参加できる時は参加していた。 <u>町内の活動だから参加しようと思った</u> 。                      |
| 70代男性   | 八木地区   | 2016年9月24日 | 漁師を引退した平成元年から、 <u>地区の行事の一環として参加するようになった</u> 。  |
| 70代男性   | 八木地区   | 2016年9月24日 | 小さいときは慰霊祭が終わった後に配られるドーナツが楽しみだったが、今では <u>地区の行事だから行かなければならない、居ないと恥ずかしいという思いがある</u> 。               |
| 70代女性   | 太田名部地区 | 2016年9月25日 | 慰霊祭をやっていることは知っていたが、平日は子どもを学校に行かせなければいけなかったため、参加したことはない。しかし <u>3月3日には自宅で拝むことがある</u> 。             |
| 80代男性   | 太田名部地区 | 2016年9月25日 | 私が小学生の頃は、学校でも神社の掃除や慰霊祭などはやって当然のことだった（当時は戦争などもあったから）。今でも慰霊祭をやるのは、 <u>やっぱり亡くなった人をきちんと供養したいから</u> 。 |

地区の慰霊祭では10代～30代の参加者は確認できなかったが、過去の慰霊祭では、小・中学生も多く参加できるような消防団の工夫があったことがわかる。太田名部地区では、2005年まで毎年3月3日に普代村津波防災訓練を行っていたが、2006年より9月下旬に普代村総合防災訓練が行われるようになったことで、3月3日の防災訓練が廃止となった。これを契機に行政主催の慰霊祭が始まったことが明らかとなった。しかし2005年以前は、防災訓練に合わせて地元消防団・住民主体で慰霊祭が行われていた。現在の慰霊祭では行政側が用意した献花用の花を使用しているが、過去の慰霊祭では各自が花や供え物を持ち寄っていた点など、慰霊祭への住民の参加スタイルが変化したことも明らかとなった。また行政主催の慰霊祭への参加者は年々減少しているが、過去の慰霊祭のような住民が主体的に供養する生活文化は現在も残されていることが住民の証言より確認できた。

### (3) 慰霊祭の効果

表3には、慰霊祭への参加動機に関する証言をまとめている。慰霊祭に参加しなかった理由に着目すると、多くは仕事や家庭の都合によるものが多いことがわかる。両地区とも漁業が盛んな地域であり、漁師を生業としている人は慰霊祭に参加するのが難しいということが明らかとなった。また太田名部地区では平日に慰霊祭が行われることも多く、子どもを学校に行かせるために準備しなければならないため参加できなかったという証言を得ることができた。漁業関係者や子育て世代の慰霊祭への参加が課題の一つであると言える。

次に、慰霊祭に参加した理由に着目すると、八木地区においては、「町内の活動だから参加した」や「地区の行事だから居ないと恥ずかしい」といった証言が多い。これは慰霊祭が単に津波災害の犠牲者への追悼の場であるだけでなく、住民が当然参加すべき町内会行事の一

表 4 広報誌における慰霊祭の告知・記事の有無

|       | 広報ひろの |    | 広報ふだい |    |
|-------|-------|----|-------|----|
|       | 告知    | 記事 | 告知    | 記事 |
| 2009年 | ○     | ○  | ○     | ○  |
| 2010年 | ○     | ○  | ×     | ○  |
| 2011年 | ○     | ○  | ×     | ×  |
| 2012年 | ×     | ×  | ○     | ○  |
| 2013年 | ×     | ○  | ×     | ○  |
| 2014年 | ○     | ○  | ×     | ○  |
| 2015年 | ○     | ○  | ×     | ○  |
| 2016年 | ○     | ○  | ×     | ○  |

つとして成立していることを示唆している。一方太田名部地区では、慰霊祭に「町内会行事」としての側面を窺わせる証言を得ることができなかった。「犠牲者を供養したい」等の明確な意図を持って住民が自発的に参加している場合が多いと言える。表4には、2009年以降の両地区の広報誌において、慰霊祭の開催に関する告知、および慰霊祭を行ったことに関する記事が含まれているか否かを示している。洋野町では普代村に比べて、広報誌に慰霊祭の告知・記事を両方記載したものが多くことから、「町内会行事」としての意味合いの強さを読み取ることができている。

表5に、慰霊祭に対する住民の思いについてインタビュー調査から抽出できた事項をまとめている。両地区とも慰霊祭を通じて津波に関して何かしらの思いを抱えていることが確認できる。津波災害の恐ろしさを再認識する場、津波防災への決意を新たにする場として慰霊祭が有効に機能している可能性が示唆された。

慰霊祭が行われている両地区の津波碑は建立から数十

表 5 慰霊祭に対する住民の思い（抜粋）

| インタビューイ | 地域     | 調査日        | 慰霊祭に対する思いに関する証言（抜粋）  |
|---------|--------|------------|--|
| 40代女性   | 八木地区   | 2016年9月24日 | 昭和三陸地震津波を経験していないが、慰霊祭に参加することで過去に大きな津波災害があったんだということを実感する。   |
| 70代男性   | 八木地区   | 2016年9月24日 | 慰霊祭をやることで「地震＝津波」という認識ができたのではないと思う。慰霊祭に参加する度に思うんだから、忘れないために集まる場所として大事だ。慰霊祭で呼びかけたことは塵の一つかもしれないが、これらが積み積み山となって3.11に繋がった。また地区の慰霊祭に毎年町長が参加しているのは本当に尊敬する。これが住民にも良い影響を与えていると思う。 |
| 80代男性   | 太田名部地区 | 2016年9月25日 | 毎年拝んでいたから3.11でうまくいったとは思わないが、供養したいという気持ちはやっぱり大切だと思う。  |

年が経過しているが、図 1 より両地区とも比較的綺麗な状態で保存されていることがわかる。インタビュー調査によると、八木地区では気付いた人が自主的に草刈りや掃除を行っており、慰霊祭だけでなく彼岸や盆の時期になると焼香する人もいと言う。太田名部地区では 2 年交代で担当を決め、同じく草刈りや掃除を実施していると言う。これらの津波碑は昭和三陸地震津波後に東京朝日新聞社に寄せられた義捐金の一部を用いて市町村が建立したものであり<sup>7)</sup>、現在も市町村の所有物であるが、建立後は地区が管理を続けてきたことが明らかとなった。両地区でそれぞれ津波碑に対する思いがあり、地区が自主的に管理してきたことが考察される。それらの活動によって津波碑に人々が集い、慰霊祭という形で津波碑との関わりを継続することができたと言える。津波碑建立後の活用・維持管理が不十分な地域が多い中、各地区で何かしらの意図を持って石碑を建て、継続的に関わっていくことで初めて津波碑が意味を成すということが八木・太田名部両地区の事例から示された。津波碑を建立して終わりではなく、その後の活用・維持管理体制を各地区で構築することが重要であると改めて提言できる。

#### 4. まとめ

本稿では、岩手県洋野町八木地区および普代村太田名部地区で東日本大震災以前から継続して行われている慰霊祭を対象とし、参与観察、資料分析、インタビュー調査からその実態を整理し、さらに慰霊祭を行うことの効果について考察した。得られた結論を以下に示す。

- 1) 両地区の慰霊祭には、慰霊祭を主催する団体、供養の形式、開催日に違いが見られた。
- 2) 太田名部地区の慰霊祭では 2008 年以降参加者数の減少傾向が見られるが、八木地区では参加者数の大きな減少はなく、横ばいで推移している。
- 3) 八木地区では 2007 年まで昭和三陸地震津波の発生日である 3 月 3 日に合わせて慰霊祭を行っていたが、消防団員や一般住民がより多く参加することを優先し、2008 年より 3 月の第一日曜日に変更された。
- 4) 太田名部地区では 2006 年から普代村主催の慰霊祭が行われるようになったが、2005 年以前も、毎年 3 月 3 日に消防団や住民が自主的に津波碑に集まり慰霊祭を行っていた。現在でも、村が行う慰霊祭の前後に住民が自主的に供養を行っている。
- 5) 八木地区では、慰霊祭が「町内会行事」の一つとして成立していることが示唆された。
- 6) 両地区とも市町村所有の津波碑を自主的に管理しており、その結果慰霊祭という形で人々が集う重要な場となった。両地区の慰霊祭は、津波災害の恐ろしさを再認識する場、津波防災への決意を新たにする場として有効に機能している可能性が示唆された。

両地区の慰霊祭が決して形式的な追悼行事ではなく、地域住民が主体的に携わる実質的な慰霊と伝承の機会であることは共通して言える。その背景には、津波災害後に建立された津波碑を、具体的な意図を持って地区で管理し続ける自主的な姿勢があり、この取り組みが、地域住民が集まる場（ここでは慰霊祭）を継続して創出することに繋がった。この津波碑と地域住民との継続的な関わりこそが、津波災害への危機意識を繋ぎ止めるのに重要な役割を果たした可能性が示唆された。これには、津波碑を今後残し続けていくべき特別な媒体と認識して積極的に関わり始めた人々の存在と、そういった人々の活動が波及効果をもたらす独特な地域性が大きく影響したと考察される。この仮説に関しては、慰霊祭の起源に関する情報も含め、より詳細に検証していきたい。

また、八木・太田名部両地区では、慰霊祭以外にも住民の災害意識の風化を留める多くの取り組みや、犠牲者を出さなかった具体的な対策がなされている。今後は他の取り組みを整理・比較分析し、災害意識の風化を防いだ、また犠牲者を出さなかった具体的な要因を明らかにすることが課題である。

#### 謝辞

本研究は日本学術振興会 課題設定による先導的人文学・社会科学推進事業・実社会対応プログラム「効果的・持続的な災害伝承を目的にした拠点構築手法のモデル化と実践的研究」（研究代表者：佐藤翔輔）の助成を受けた。慰霊祭の参与観察においては、株式会社浜銀総合研究所の辻本侑生氏に協力を頂いた。またインタビュー調査においては、洋野町役場の佐々木貴光氏、普代村役場の森田安彦氏に多大なるサポートを頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

#### 参考文献

- 1) 寺田寅彦：地震雑感/津浪と人間，中央公論新社，195pp.，2011.
- 2) 定池祐季：石垣島における津波伝承―「明和大津波」の追悼行事から―，第 35 回日本自然災害学会学術講演会講演概要集，pp.57-58，2016.
- 3) 辻本侑生：昭和三陸津波の忘却と記憶―岩手沿岸部における「3 月 3 日」の諸相―，日本民俗学会第 883 回談話会発表レジュメ，12pp.，2015
- 4) 岩手県 HP: <http://www.pref.iwate.jp/>，参照 2016-09-26.
- 5) 津波デジタルライブラリ: <http://tsunami-dl.jp/>，参照 2016-09-26.
- 6) 総務省消防庁：平成 23 年（2011 年）東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）について（第 153 報），<http://www.fdma.go.jp/bn/153.pdf>，参照 2016-09-26.
- 7) 国土交通省東北地方整備局：津波被害・津波石碑情報アーカイブ（オンライン），<http://www.thr.mlit.go.jp/road/sekihijouhou/>，参照 2016-09-26.